

研究報告

# がんの子どもの復学に関する北海道の高校教員の意識 ～看護師との連携について

丸岡 里香<sup>1)</sup> 畑江 郁子<sup>2)</sup> 伊織 光恵<sup>3)</sup>  
佐藤 朱美<sup>1)</sup> 野口 直美<sup>4)</sup> 杉山 厚子<sup>2)</sup>

1) 北翔大学教育学部教育学科 2) 北翔大学北方圏学術情報センター研究員  
3) 北海道科学大学保健医療学部看護学科 4) 旭川東栄高等学校

## 抄 録

小児がん体験者が復学する際の支援には学校と医療の連携が必要と考える。そこで北海道の高等学校240校を対象に、養護教諭と一般教諭が看護師との連携についてどのような認識を持っているかを調査し、今後の支援の示唆を得ることを目的とした質問紙調査を行った。その結果、一般教諭、養護教諭合わせて441名(43.6%)の有効回答が得られ、小児がん体験者と関わった経験のあるものは97名(22.0%)であった。そのうち「復学の受け入れの困難があった」と回答したものは41名(43.6%)であった。困難の内容を自由記載で聞いたところ「学習面・進学について」が13名(31.7%)と一番多かった。今回は本調査のうち看護師との連携についての意識の自由記載を内容分析した結果、看護師との連携に積極的な意識は少なく、医師に比べて担当がわかりにくいなどの課題が明らかになったことを報告する。

キーワード：がん、復学、看護師、教員

## I. 結 言

今日我が国の小児がん体験者は成人600人～1000人に一人であり、がん治療の進歩は、がんを慢性疾患として捉えられるまでになっている<sup>1)</sup>。その結果、学童期に治療をした子どもたちが地域の学校へ復学する率も高くなっているが、復学し学校生活が再会できても、病院への定期的な通院をし、外来での治療の継続や治療の影響による晩期障害などがあることから、健康管理を重視した生活が続くことは避けられない。そうした復学後の生活についての報告によると、小児がん体験者と接触のある教員は多くはなく、医療従事者は教諭に情報交換を是たらきかけ、学校の受け入れの環境を整えることの必要を感じているが<sup>2)</sup>、教諭が復学の受け入れの際に苦労している要因が情報の不足であること<sup>3,4,5)</sup>などが明らかにされている。しかし、これまでの報告は義務教育の復学に関する教員を対象としたものであり高等学校復学時の報告はない。高等学校はその後の人生の進路を決める段階にあり、大学進学率が50%を超える現在において、受け入れ態勢を整えることは小児がん経験者のQOLを考

えるためにも重要であると考え。そこで、本研究では医療機関と教育機関の連携について高等学校の一般教員と養護教諭それぞれがどのような意識をもっているかを調査し、連携の課題を明らかにすることで支援につなげる示唆を得ることを目的とした。

## II. 方 法

### 1. 研究協力者

調査に先立ち北海道内の公立高等学校教育委員会と連絡を取り、調査の趣旨と方法について説明し了解を得た後、高等学校240校の校長には研究依頼文と説明書、養護教諭(291名)ならびに各学年の担任教諭である一般教諭3名(720名)計1011名には、依頼文と研究説明書・無記名自記式質問紙を郵送した。研究協力の意思がある場合には、郵送により回答用紙を返却してもらうことで研究協力の同意とみなした。

### 2. 調査期間

平成26年6～7月。

### 3. 調査内容

- 1) 研究協力者の背景：職種，年齢，教諭としての経験年数。
- 2) 復学の支援のための準備について
- 3) 医療者との連携に対する意識について

### 4. 分析方法

質問紙は441名から回収され（回収率43.6%），すべてを有効回答とした。統計ソフトSPSS for Windows ver.22を用いて，各項目の記述統計を行った後，各項目の回答を養護教諭と一般教諭で比較するために， $\chi^2$ 検定を用いた。有意水準は5%以下とした。今回はそのうち，教員が医療職との連携を求めているか否かを問い「連携をとりたい」と回答した292名を抽出し，さらに分析した。また，連携をとりたい内容についての自由記述の内容を集約し，内容分析の手法を用いて分類し【入院中の生活】【今後の生活】【病状・治療】【今後の対応】【精神面・心理的ケア】の5つのカテゴリーに分類し集計した。データの分析は協同研究者間で確認しながら進め，妥当性を確保するように努めた。

### 5. 倫理的配慮

研究の実施に当たり，北海道教育委員会に調査の連絡をし，北海道医療大学倫理委員会の承認を得た。対象高等学校には校長と，対象教員へ書面にて研究の主旨を伝え，研究の参加は自由意志であること，研究に同意しない場合も不利益を被ることはないこと，途中撤回の自由，研究終了後のデータの処分，情報管理の徹底について文書で説明した上で同意を得た。

## Ⅲ. 結 果

### 1. 研究協力者の背景（表1）

質問紙は441名から返送され（回収率43.6%），全てを

表1 研究協力者の背景

		計 (n=441)	養護教諭 (n=149)	一般教諭 (n=292)	p 値
年 齢	～29	46 (10.5)	14 ( 9.4)	32 (11.0)	0.002
	30～39	90 (20.5)	24 (16.1)	66 (22.8)	
	40～49	136 (31.0)	36 (24.2)	100 (34.5)	
	50～	167 (38.0)	75 (50.3)	92 (31.1)	
	無回答	2 ( 0.4)	0 ( 0.0)	2 ( 0.7)	
経験年数	10年未満	85 (10.7)	21 (14.1)	64 (21.9)	0.034
	10～20年	99 (22.5)	29 (19.5)	70 (24.0)	
	20年以上	256 (59.0)	99 (66.4)	157 (53.8)	
	無回答	1 ( 0.2)	0 ( 0.0)	1 ( 0.3)	

$\chi^2$ 検定による p 値を示した

有効回答とした。回答のあった441名の年齢は，養護教諭では50歳以上の割合が75名（50.3%）で最も多く，一般教諭では40～49歳の割合が100名（34.2%）で多かった。養護教諭と一般教諭ともに20歳代の割合が少なかった（10.4%）。経験年数では20年以上の教諭が全体の59.0%を占め，養護教諭では99名（66.4%），一般教諭は157名（53.8%）と最も多く10年未満が養護教諭で21名（14.1%），一般教諭で64名（21.9%）と最も少なかった。

### 2. 小児がん体験者と関わった経験

がんの治療中，あるいは治療後の小児がん体験者と関わった経験に有意差がみられ，「ある」と回答した割合が全体では97名（22%）であり，そのうち養護教諭では59名（39.6%），一般教諭は39名（13.2%）であり養護教諭の割合が高く有意な差がみられた（ $P=0.00$ ）。

### 3. 復学の準備に関して

今後復学する生徒を受け入れることになった時に，準備として情報を得たいと思うかを聞いたところ（表2）全体では332名（75.3%）が「情報を得たい」と答え，養護教諭では103名（69.1%），一般教諭では229名（68.4%）と養護教諭の割合が高かった。

情報を得たいと答えた332名に得たい内容について複数回答で聞いたところ（表3），「復学後の生活の注意点」が74.8%と最も高く，ついで「退院後の治療の継続や副作用のこと」が72.1%，「病気のこと」が67.1%であったが，「復学への生徒の気持ち」は50.8%と最も低かった。

さらに，その情報を誰から得たいと思うかについて聞いたところ（表4），全体では「医師」「保護者」「生徒」「看護師」「院内学級の教諭」の順であり，養護教諭も同順であったが，一般教諭は「医師」「保護者」「看護師」の順であった。

表2 今後の情報交換について

		計 (n=441)	養護教諭 (n=149)	一般教諭 (n=292)	p 値
情報を得たい	はい	332 (75.3)	103 (69.1)	229 (78.4)	0.05
	いいえ	55 (12.5)	7 (4.7)	48 (16.4)	
	無回答	54 (12.2)	39 (26.2)	15 (5.1)	

$\chi^2$ 検定による p 値を示した

表3 復学後の生徒に関する得たい情報

(複数回答)

	計 (n=441)	養護教諭 (n=149)	一般教諭 (n=292)
病気のこと	296 (67.1)	100 (67.1)	196 (67.1)
退院後の治療の継続や副作用のこと	318 (72.1)	114 (76.5)	204 (69.9)
復学後の生活の注意点のこと	330 (74.8)	116 (77.9)	214 (73.3)
復学への気持ち	224 (50.8)	85 (57.0)	139 (47.6)
その他	22 (4.9)	1 (0.7)	21 (7.2)

表4 誰から情報を得たいのか

(複数回答)

	計 (n=441)	養護教諭 (n=149)	一般教諭 (n=292)
生徒	181 (41.0)	85 (57.0)	96 (32.9)
保護者	263 (60.8)	108 (72.5)	155 (53.1)
医師	323 (73.2)	110 (73.8)	213 (72.9)
看護師	160 (36.3)	59 (39.6)	101 (34.6)
院内学級の教諭	151 (34.2)	54 (36.2)	97 (33.2)
その他	10 (2.3)	1 (0.7)	9 (3.1)

表5 看護師との連絡について

		計 (n=441)	養護教諭 (n=149)	一般教諭 (n=292)	p 値
連絡をとりたい	はい	292 (66.2)	87 (58.4)	205 (70.2)	0.07
	いいえ	20 (4.5)	11 (7.4)	9 (3.1)	
	わからない	97 (22.0)	34 (22.8)	63 (21.6)	
	その他	29 (6.6)	16 (10.7)	13 (4.5)	
	無回答	3 (0.7)	1 (0.6)	2 (0.6)	

$\chi^2$ 検定による p 値を示した

#### 4. 看護師との連携について (表5)

退院後に入院していた病院の看護師と連携を取りたいと思うかを聞いたところ、全体で292名 (66.2%) が「はい」と答え、「いいえ」と答えたのは20名 (4.5%) であった。「はい」と答えた養護教諭は87名 (58.4%) であり一般教諭では205名 (70.2%) であった。また「わからない」と答えたものは全体で97名 (22.0%) であり養護教諭は32名 (22.8%)、一般教諭は63名 (21.6%) であった。「その他」は全体で29名 (6.6%) であった。看護職との連携についての自由記述では、一般教諭では「退院後の様子を伝えたい」が5名、「退院後も情報交換したい」が3名、その他「体調変化が生じたときに、その都度適切な助言をいただきたい」「生徒に関わることを話し合っていきたい」などの意見があった。同じく養護教諭では「医療的ケアの必要時に相談にのってもらいたい」「サポートについて情報交換し共通理解を持ちたい」「保護者以外の客観的な意見等を情報交換した

い」「一緒に考え実践したい」等の意見があった。

その一方で、養護教諭では「本人と保護者で十分」「個人情報教えてもらえないと思っている」「養護教諭にそこまで望まれているか疑問である」などの連携をとる必要性を疑問視する意見がみられた。

#### 5. 連携をとりたい内容

自由記載にて求めた「連携を取りたい内容」は、一般教諭では199名、養護教諭では90名から記載され、キーワードを分類し【入院中の生活】と【今後の生活】【病状・治療】【今後の対応】【心理的ケア】5つのカテゴリーに分類し集計した。各カテゴリーの内容については以下にまとめた。

1) 【入院中の生活】について連携をとりたいと記載したものは、一般教諭では38名 (19%)、養護教諭では23名 (25.6%) であった。その内容は一般教諭では「入院中の生活」「入院中の様子」「入院中に経験したこと」等であり、養護教諭では「入院中の様子」が多く「闘病

生活」という一般教諭にない表現の記載も見られた。

2) 【今後の生活】については、一般教諭では73名(36.7%)、養護教諭では38名(42.2%)であった。その内容は一般教諭では「生活で気をつけなければいけないこと」「集団生活上の注意」等であり、養護教諭では「生活上の注意点・留意点」がほぼ全員であった。

3) 【病状・治療】については、一般教諭では47名(23.6%)、養護教諭では29名(32.2%)であった。その内容は一般教諭では「復学後の治療方法」が多く、次いで「副作用について」等であり、養護教諭は「治療経過」「治療内容」「副作用」等であった。

4) 【今後の対応】については、一般教諭では72名(36.2%)、養護教諭では35名(38.9%)であった。その内容は一般教諭では「健康上の留意点・注意点」「今後の支援」等であり、養護教諭では「病気の予後」「体調不良時の対応」などであった。

5) 【心理的ケア】については、一般教諭18名(9.0%)、養護教諭は23名(25.6%)であった。内容は一般教諭では「生徒の気持ち・不安・困りごと」「精神面のケア」などであった。

## Ⅳ. 考 察

### 1. 復学準備に関して

復学を受け入れる教員が入院中の情報を得たいと思っている割合は、一般教諭に比べ養護教諭の方が高い割合であった。学校の生活を支援していく中で、学校内で唯一医療的な知識をもつ養護教諭に求められる役割が多くなることは予測できることから、養護教諭自身も、準備としての情報を得たいと思っているのではないかと考えられる。

復学を受け入れる準備として得ておきたい情報は「生活の注意点」が約75%であり最重要な情報として捉えられていることが示されている。また、「治療の継続や副作用」「病気のこと」に関しても約70%が関心をもっており、知識を得て復学の環境を整えたいという姿勢がうかがえるが、「復学への生徒の気持ち」に関しては、一般教諭で特にほかより関心が低くなっているのは、精神的なケアが一般教諭の対応ではないという認識ではないかと考えられる。

### 2. 看護師との連携について

看護師と連携をとりたいか否かでは、養護教諭では約60%、一般教諭では約70%がとりたいと答えているが職種によって差が見られた。また、「その他」と回答した中で記載された自由記載に注目すると、教諭側からは

「医師と連携をとりたい」「保護者と連携をとりたい」と看護師と積極的な連携の必要を感じていない記載や、「看護職の誰と連携をとるかがわからない」などのルートの不明確さが連携の対象として考えられないことにつながっていると考える。この結果から、教諭側の認識と看護師側の認識に差があるのではないかと考えられる。病院の中で看護師は疾病の治療と平行してその患者の発達やQOLを考えた看護目標を立て、看護計画の基に看護を提供している役割であることの認識が薄く、診療の介助のイメージが強く伝わっているのではないかと考えられる。一般に担当医師は明確であり治療に関するすべてを担っていると受け取られていることに対し、看護師は個人の受け持ちである認識は持ちにくいのではないかと考える。

### 3. 連携をとりたい内容について

どのような内容の連携をとりたいと思うかでは【今後の生活】【今後の対応】の順に多かったが養護教諭のほうがより関心を持っている割合が高かった。大見ら<sup>6)</sup>によると、教員は学校での対応が不安なときには相談できる窓口がほしいと思っていることが示されており、本調査でも継続的な連絡をとることができるが取れることや、再発に備えた情報の共有の必要を記述している回答が見られている。また、【精神面・心理的ケア】について養護教諭は一般教諭の倍以上の割合が「知りたい」と答えていた。これは学校生活の全般を支援する養護教諭と高等学校の担任や教科での関わりとの職種の違いが現れていると考える。

### 4. 教育現場と臨床の連携について

看護師が退院後の生徒にかかわりを持ちたいと思っていることに対して「継続的に連携していきたい」という回答も有り、今後復学する生徒を迎えるときには具体的な連携を持てることが期待できる。しかし、退院時には入院中の生活を支援してきた病棟の看護師が学校との連携を取ることができたとしても、その後の通院の状況の中で学校生活の支援の目的で病棟との関わりを継続することは現実的ではない。そうしたシステムの課題が入院生活と学校生活の距離を大きくしているのであれば、その間をつなぐ役割としてソーシャルワークの介入が必要となるのではないだろうか。ソーシャルワークの介入によって復学後の通学や学業の困難を解決していくことも、その後の進路への支援となると考える。さらに復学した本人のメンタル面を支える為には学校内の養護教諭だけではなく、継続したカウンセリングによるメンタルサポートも必要ではないかと考える。今後「障害者差別解消法」などが各学校の中で検討されていく中で、病院

内のスタッフと学校内の直接的な連携だけでなく、福祉の支援によって両者がつながっていくことが期待される。

<sup>6)</sup> 大見サキエ, 河合洋子。小学校教員のがんの子どもの復学支援—一般教員, 院内学級教員, 養護教諭の面接調査—。医学と生物学 2013; 157: 726-731.

## V. 結 論

1. 養護教諭の4割が小児がんを経験した生徒に関わった経験を有していたが, 看護師との連携の必要を感じているものはそのうちの7割であった。
2. 看護師との連携をとりたいと答えた教諭は【今後の生活】【今後の対応】について関心が高かったが【心理的ケア】については養護教諭は約26%であり一般教諭は9%であった。
3. 教諭側は医療との連携をとりたいと思っているが, 現在はその方法について具体的なルートが明確になっていないために距離を感じていた。
4. 小児がんの経験者の復学には, 再発に備えた支援が必要であり退院時だけでなく長期的な連携を考える必要がある。
5. 長期的な支援を考えるときには医療と教育の間を「医療ソーシャルワーカー」の介入などを視野に入れた支援体制が望ましいと考える。

### 謝辞

本研究の調査にあたり, 北海道内の高等学校の教員の皆様にご協力いただきましたことに深くお礼申し上げます。

### 付記

本研究は北方圏学術情報センターポルトの研究助成を一部受けて行なったものである。

### 文献

- <sup>1)</sup> 鶴澤正仁。小児白血病のトータルケア I ; 化学療法に伴うケアを中心に 小児白血病克服に向けた今後の課題 小児看護 2006 ; 29 : 11 : 1546-1550.
- <sup>2)</sup> 副島堯史, 村山志保, 東樹京子, 他。小中学校の教員における小児がんへの認識および小児がん体験者への支援。小児保健研究 2014 ; 73 : 5 : 697-705.
- <sup>3)</sup> 大見サキエ, 須場今朝子, 高橋佐智子, 他。がんの子どもの教育支援に関する小学校教員の認識。小児保健研究 2007 ; 66 : 2 : 307-314.
- <sup>4)</sup> 大見サキエ, 宮城島恭子, 河合洋子, 他。がんの子どもの教育支援に関する小学校教員の認識と経験 - B市の現状と課題 - 。小児がん看護 2008 ; 3 : 1 -12.
- <sup>5)</sup> 畑中めぐみ。思春期の小児がん患児の復学時の情報開示。小児保健研究 2013 ; 72 : 1. 41-47.

## Perceptions of high school teachers in Hokkaido related to students suffering from cancer returning to school —cooperation with nurses—

To assist students who have been suffering from childhood cancers on the return to school requires cooperation between the schools and medical institutions. The objective of this study is to investigate the perceptions of school nurses and teachers about cooperation with the hospital nurses and also to obtain useful ideas for future cases where assistance is needed. We conducted a questionnaire survey of 240 senior high schools in Hokkaido.

A total of 441 valid responses were obtained from teachers and school nurses (43.6%). Of these, 97 respondents (22.0%) had the experience of being involved with students with childhood cancers. Of the 97, 41 (43.6%) of the respondents reported difficulties in making the arrangements necessary for students returning to school.

The most frequently mentioned difficulty in the written comments ( $n=13$ , 31.7%) was problems related to “study and advancing to the next stage of education”. From the content analysis of the written comments about perceptions of cooperation with nurses, it was found that there were few respondents who had positive attitudes toward the cooperation with nurses. The findings also identified the issue that it is more difficult to know which nurses are in charge of the cooperation with the schools compared with knowing who are the physicians in charge.

Key word : cancer, returning to school, nurse, high school teachers